『本朝小説』における引用の分析
― 引用内容と文脈の関連性について ―

An Analysis of Quotations in Kawai Chūzō's Honchō Shōsetsu: On the Relationship Between Quoted Content and Its Context

劉　　佳　佳
LIU JIAJIA

岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要
第60号　2025年12月　抜刷
Journal of Humanities and Social Sciences
Okayama University Vol.60 2025

『本朝小説』における引用の分析
―引用内容と文脈の関連性について―

劉　　佳　佳*

目次

はじめに
1.『本朝小説』における引用の方法について
2.『本朝小説』における引用の分類について
おわりに

はじめに

『本朝小説』は、幕府領の備中国小田郡大江村（現：岡山県井原市大江町）出身の漢学者川合仲象（1728―1804）によって執筆された中国白話小説である。寛政11年（1799）に、京都烏丸通三条下ル町の田原勘兵衛によって印刷された『本朝小説』は、唯一現存する版本であり、この版本は国立国会図書館のデジタルコレクションで電子版本が公開されている。この版本の正文の前に寛政9年（1797）に川合仲象が執筆した序文が付され、各葉には挿図と訓点が添えられている。また、半葉につき九行、各行には約十八字が記載されている。

石崎又造氏[1]は、『本朝小説』は浄瑠璃または歌舞伎の取材をもとに制作された作品であり、伯州石川五衛門・熊坂長半、之に浪華の薪屋坂田金時等を取合せた女仇討の漢文の戯作と指摘している。一方、『日本古典文学大辞典』第5巻（岩波書店、1984年）には、『本朝小説』が熊坂長半によって父坂田公時を殺された娘・阿岩が婢女阿林の助けを得て、数々の困難を乗り越えながら父の仇を討つ物語を白話（中国語の口語体）で記したものであると述べている。さらに、本文中には『唐詩選』などから多くの漢詩が引用されており、その量が煩雑なほど多い点を特徴として挙げている。

本書の総字数6786字のうち2093字が引用部分に該当し、全体の約3割を占めている。本書では『唐詩選』、『和漢朗詠集』、『古文真寶』などの典籍から、漢詩、俗謡、俚諺などを百六例引用している。本稿では、これらの引用を詳細に分類しており、その中に代表的な例[2]を抽出して分析し、『本朝小

*　岡山大学社会文化科学研究科博士後期課程

1　石崎又造『近世日本に於ける支那俗語文学史』（清水弘文堂、1940年）に拠る。この書籍の第五章「白話文学と国文学」の第五節「浄瑠璃の翻訳と唐音の俗謡」に、『本朝小説』は浄瑠璃或いは歌舞伎の取材をもとに制作された作品であると指摘している。また、この書籍の付録二の近世俗語文学書目年表に『本朝小説』の情報が記されている。

2　文字数の制約上、ここでは各分類の代表的な例のみを挙げるにとどめる。全百六例の詳細な分析内容については博士論文に収録している。

説』における引用の役割と意義について論じる。

1.『本朝小説』における引用の方法について

本題に入る前に、『本朝小説』における川合仲象の引用の方法について説明する。

図1　『本朝小説』（二十七丁裏　二十八丁表）

図1は『本朝小説』の二十七丁裏と二十八丁表の写真である。この図が示すように、引用箇所として行頭に一文字分の空白が設けられている部分は、作者である川合仲象が引用であることを明確に示していると判断できる。例えば、図1の二十七丁裏の第一行から第二行まで引用される駱賓王「易水送別」[3]の「此地別燕丹、壮士髪衝冠。昔時人已沒、今日水猶寒」、第五行から第六行まで引用される楊炯「夜送趙縦（夜　趙縦を送る）」の「趙氏連城璧、由来天下傳。送君還舊府、明月満前川」、二十八丁表の第一行から第二行まで引用される孫逖「同洛陽李少府観永樂公主入蕃（洛陽の李少府と同じく永樂公主の蕃に入るを観る）」の「邊地鶯花少、年来未覚新。美人天上落、龍塞始應春」、第七行から第八行まで引用される張九齢「照鏡見白髪（鏡を照らして　白髪を見る）」という四首の詩歌は、一字下げられているので作者自身が明確に引用を示したものと言える。

一方、図1の二十八丁表の五行目から六行目に記された李白「秋浦歌（秋浦の歌）」の「白髪三千丈、縁愁似箇長」という対句は、詩歌の冒頭に一文字分の空白がなく、本文の中に文字を詰めた形で引用されている。この形式のものにも、引用であると考えられるものもあるが、慣用句的に使用

---

[3]　図1が示す通り、92（通し番号）の駱賓王「此地別燕丹、壮士髪衝冠。昔時人已沒、今日水猶寒」は、本書中で唯一、詩の出典と作者が明示された引用例である。引用部の直後に「駱賓王送人易水懐古」と付記され、詩の出典が明確に記されている。

されていると思われるものなど実際に引用であるか否かを判断するのが困難な場合も含むので、本稿では川合仲象が明示した引用のみに焦点を絞り、その引用方法およびその意義について考察を行う。

2.『本朝小説』における引用について

『本朝小説』における引用内容を紹介するにあたり、本作品の概要を簡潔に述べる。本作品は、以下の三つの主要部分に大別される。

作品の第一丁表から第八丁表にかけて展開される第一部分では、伯州戸田に住む石川五門夫婦が夜宴を開き、阿岸という女性が夢の中で恋人である熊坂長半の新婦を呪い殺すという事件が描かれる。

続く第八丁表から第十九丁裏の第二部分では、長半が浮気の罪により流罪となり、その途上で女性主人公・阿岩の父親坂田金時に世話になることを発端として展開する。長半は公時に代わり、貸与したまま返済を拒んでいた舟越から金銭を回収した。ある日、公時一家が東隣に婚宴に出かけ、長半が留守番をしていた折に悪心を起こす。長半が金を盗んでいる最中に公時一家が帰宅し、彼は恩人である金時を殺害して逃亡する。

そして、第十九丁裏から第三十二丁裏にかけて展開される第三部分では、阿岩は仇敵である長半を追って、旅に出るが、様々な困難に出会い、途中で強盗にも捕らえられることが描写される。その旅の途中、長半によって息子の両作を殺された一寸徳兵と知り合う。長半の行方を突き止めた後に、阿岩・阿林（阿岩の侍女）・徳兵の三人は協力し合い、ついに長半を討ち果たす。

本論では、引用の分析の過程において、必要に応じて物語のあらすじにも言及する。『本朝小説』において、作者が明確に示した引用箇所は合計で百六例である。これらの例を順序に従って整理し、1～106の通し番号を付した。以下の表1の通りとなる。これらの百六例について引用内容と文脈との関係性を分析した結果、①冒頭の導入、②予兆、③状況描写、④登場人物の台詞、⑤人物描写（性格・感情・外見）、⑥景色描写、⑦結末のまとめという七種類に分類することが可能であった。

以下では、各種類について代表的な例を挙げ、それらについて分析する。

表1 『本朝小説』における百六例の引用の役割

引用の目的	数	通し番号
①冒頭の導入	1	1
②予兆	7	3、9、15、16、34、38、78
③状況描写	28	2、11、13、20、22、30、32、35、37、40、57、62、63、67、68、75、77、79、82、84、85、88、91、92、93、96、97、100

④登場人物の台詞	13	4、10、19、51、52、53、54、55、69、70、95
⑤人物描写（性格・感情・外見）	6	性格：7、64、65、76、81、88
	18	感情（心理）：5、8、12、14、23、24、25、27、31、33、39、59、60、71、73、83、89、94
	1	外見：41
⑥景色描写	28	6、17、18、21、26、28、29、36、42、43、44、45、46、47、48、49、58、61、66、72、74、80、86、87、90、94、98、99
⑦結末のまとめ	4	103、104、105、106

2．1．①冒頭の導入

「冒頭の導入」とは、『本朝小説』の第一丁表面において、序文の直後の題名「本朝小説」と正文のあいだに位置し、正文の直前に引用された詩歌を指す。本作において導入部に詩歌が引用されているのは以下の1例のみである。

1　世人結交須黄金　　　　世人　交りを結ぶに黄金を須ゆ
　　黄金不多交不深　　　　黄金多からざれば　交り深からず
　　縦令然諾暫相許　　　　縦令然諾して暫く相許すも
　　終是悠々行路心　　　　終に是れ悠々たる行路の心

1は張謂の「長安主人の壁に題す」であり、進士試験を受験した際の待遇や落第後の境遇への不満を背景に、金銭の多寡によって人間関係が左右される軽薄な世情への憤りを表現した[4]ものである。本詩は、物語の内容に入る前に、この詩が正文の冒頭に引用されることで、物語全体の構成上、導入部分として機能すると同時に、内容面においても重要な意義を持つ。すなわち、この詩が示す「金銭の多寡によって交友が左右される軽薄な人情への憤り」[5]という主題は、物語全体の展開、とりわけ第二部分において重要なテーマとなっている。たとえば、公時と舟越、公時と長半[6]という二組の人間関係において、金銭が絡むことで人間関係がどのように変化するかが描写されている点は、この詩の主旨と物語の内容が一致しているといえる。このため、この詩が物語の冒頭に配置されたのは、後続する物語の内容の導入の働きを持たせる意図があると考えられる。

4　東洋文庫　服部南郭述／日野龍夫校注『唐詩選国字解』第三巻　巻七七言絶句1982．196～197頁。
5　同注4。
6　金時は長半の困窮時に援助を施したが、長半は恩人である金時を殺害し、その後、逃亡するという背信的行為に及んだ。

2. 2. ②予兆

ここでいう「予兆」とは、未来の事象を暗示または予告するものの意味である。本書においては、引用された詩歌が予兆としての機能を果たしているものがある。それは、「登場人物の運命の予兆」と「物語の展開の予兆」の二つに大別されるが、その例は七例ある。以下にそのうちの四例の具体例を挙げて考察を行う。

9　好事不出門　　　　好事は門を出でず
　悪事揚千裏　　　　悪事は千里に揚がる

9の内容は、良い事はなかなか知れわたらないが、逆に悪い事はすぐに世間に広まってしまうものであるという教訓である。物語の展開を踏まえると、9の前に、石川夫婦に仕える婢女・阿岸が登場し、恋人であった熊坂長半に裏切られたため、長半の新婚の夜にその花嫁を夢で呪い殺したという事件の経緯が描かれる[7]。9の後には、まもなく阿岸の父親である日本[8]が石川夫婦の家を訪れたことで、阿岸の殺人事件が知られることになる。9は、阿岸が夢で呪い殺したことが隠されず、すぐに明るみに出ることを暗示している。

15　昨日樓上梳雲鬢　　昨日樓上にて雲鬢を梳り
　今日潦衣欲乞食　　今日潦衣して食を乞はんと欲す

15の直前では、新婚の夜に阿岸が元恋人の花嫁を呪い殺した出来事が描写されている。その後、官府の役人による調査が行われたものの、殺人の事実は未だ明らかにされていない。この状況において、この詩を引用することで、阿岸の未来が不確定であることを示唆している。詩の前半「昨日樓上梳雲鬢」は、阿岸がかつて石川夫婦の家で置かれていた華やかな境遇を象徴している。一方で、後半の「今日潦衣欲乞食」は、阿岸がこれから直面する不安定で悲惨な運命を予兆している。この詩は文脈上、「阿岸」の運命を予兆するものであると解釈できる。

16　觀身岸額離根艸　　身を觀れば　岸額　根を離れた草
　論命江頭不系舟　　命を論ずれば　江頭　系がざる舟

---

[7]　『本朝小説』において阿岸が復讐を遂げたことを示す直接的な描写は、「阿岸臥枕、寬寬開喩、大息数回汗濡被（阿岸は枕に眠った。ゆったりと嘆息の言葉を漏らし、数回溜め息した。汗が布団を濡らした。）」などわずか十五文字である。

[8]　日本は阿岸の父親の名前である。

16は物語の第一部分の最後に引用され、構成上は、第一部分の内容を総括する役割を果たしている。内容の面では、16自体は『和漢朗詠集』の「無常」部に属しており、「わが身の落着くところがないことを嘆いたもの」[9]という主旨である。物語において16のような自らの身の落ち着く場所がないことを嘆いた内容を、第二部分の冒頭に、長半が自らの罪を背負って流放へ行く場面で、詩として引用されている。それによって、長半の不安に満ちた未来の旅の生活が予兆されているのである。

78　運尽螢空去　　　　運尽きて　螢空しく去り
　　時來滕王閣　　　　時來たれば　滕王閣

78は、人生の盛衰や運命の浮き沈みを詠んだ句である。注目すべき点は78の直前の77の内容「刑鞭蒲朽螢空去、諫鼓苔深鳥不驚（刑鞭蒲朽ちて螢空しく去りぬ、諫鼓苔深らして鳥驚かず）」である。77は『和漢朗詠集』から引用されて、「国内が平和で罪を犯す者がないので、あの劉寛が用いたという蒲の鞭までも使うことがなく、蒲は朽ちて螢となって飛び立ち、天子に訴える者がいないので、あの帝堯が置いたという諫めの鼓も苔むして、鳥も鼓の音に驚くことがない」[10]という内容を描写する。平和的社会の状況を描写している。

前文では、阿岩が旅に出た際に目にした社会の状況が描写されている。その中で「大制所出，金錢如塊（大制の出づる所、金錢塊の如し）」という語句が引用内容の直前に置かれており、これは金銭が塊のように扱われる当時の社会状況を示すものであり、引用内容の77と呼応している。一方、78の内容は前文との関連が比較的弱く、むしろ後文とのつながりが強いと考えられる。実際、78の後には、阿岩が浅草を訪れた際に目にした景観の描写が続き、物語における場面転換が示されている。同時に、勇位小説が浅草の茶店で初めて登場する場面も描かれており、彼と狂者がかつ仇敵を抱えていることから、その登場は復讐行為の予兆として機能している。78は、人生の無常観と時運による繁栄の両面を対比的に表現しており、登場人物である勇位小説の運命の変転を予兆する役割を果たしている。

2. 3. ③状況描写

状況描写は、本書において詩歌が引用される際の主要な目的の一つである。⑥と同数で最も多い、二十八例の本書の状況描写は、物語の場面や背景、登場人物の置かれている状況を描写することにより、読者に情景や雰囲気を伝えるとともに、物語の流れを補完する役割を担っている。本書では、

9　日本古典集成『和漢朗詠集』、岩波書店、1983年、294～295頁。
10　日本古典集成『和漢朗詠集』、岩波書店、1983年、249頁。

詩歌の引用が状況描写を通じて物語世界を効果的に表現する重要な手法として用いられている。本稿では、以下の七例から本書における状況描写の具体例を論じる。

2　翻手作雲覆手雨　　手を翻せば雲と作り　手を覆せば雨
　紛々輕薄何須數　　紛々たる輕薄　何ぞ數ふることを須いん
　君不見管鮑貧時交　　君見ずや　管鮑貧時の交り
　此道今人棄如土　　此の道　今人　棄てて土の如し

2は本書の正文の第一丁表に引用され、2の直前に「伯州戸田縣姓石川、名五門、赤貧已極、夫妻兩口齊眉守困（伯州の戸田縣に、姓は石川、名は五門、きわめて貧しくて、夫婦二人は相互に敬っていながら、貧困に安んじる）」という内容がある。この内容は物語の背景として、石川夫婦が互いを敬い合いながら貧しい生活に甘んじていた状況を描写している。その後、この詩歌の引用により、二人の質素ながらも堅実な生活が強調されている。このように、詩歌を引用することで生活の状況を具体的に示し、物語の場面に奥行きを与えている。

11　載鬼一車何足畏　　鬼を載せること一車は何ぞ畏るるに足らん
　掉巫三峽未為危　　巫を掉（うごか）す三峡は未だ危うしと為さず

11は、物語の第一部分に位置しており、直前の「戒子孫此樓不可再登」（この楼に再び登らないよう子孫に戒めるべきである）という一文と密接に関連している。それ以前の場面では、阿岸の父親である日本が石川夫婦の家を訪れたことにより、阿岸による殺人事件が石川夫婦まで知られることになる。石川夫婦は、阿岸がいる楼上の様子を確認しようとして、突発的状況に直面する。その際の描写が、「一連新發、奪盞傾樽、四面齊上、知進不知退。墮重在樓、人鬼異道、関張無由、遁閻王門、恐首恐尾、闇裏朦朧、握汗切齒、拔足挽袖（一連　新發し、盞を奪ひ樽を傾け、四面より齊しく上り、進むを知りて退くを知らず。重きを負いて樓に墮ち、人と鬼とは道を異にし、関張も由無く、閻王の門を遁る。首を恐れ尾を恐れ、闇裏に朦朧として、汗を握り齒を抜き、足を抜き袖を挽く）」である。「恐首恐尾」「闇裏朦朧」「握汗切齒」「拔足挽袖」といった語彙によって、非常に緊張している人々の心理が生々しく描かれている。この場面では、危険な状況における人々の心理的な不安定さが描写されており、詩歌を引用することで状況の緊迫感が強調されている。

13　中流失船　　中流にて船を失へば
　一瓢千金　　一瓢も千金に値す

13は、「中流で船を失えば、一つの瓢箪が千金に値するような状況になる」という意味を持つ。これは、事態が緊急に至ると小さなことでも非常に重要になることを示している。13が引用されている場面では、病気により家に留まっていたため、遠い殺人の現場に赴くことができなかった阿岸が殺人を実行したか否かについて、周囲の人々が激しく討論を繰り広げている。この引用を通じて、阿岸が殺人したかどうかという事実を確認しようとする場面の緊迫感と、それに伴う議論の激しさが巧みに表現されている。

20　屈原詩賦懸日月　　　　屈原　詩賦　日月に懸かり
　　楚王臺榭空山丘　　　　楚王　臺榭　山丘に空し

20の直前の「長半恤然無言」とは、長半は悲しげに無言であったという意味であり、この場面で、長半は流浪に入ってから、屋島を経て、船頭の那須与一の事情を聞いた後の反応である。20の内容は、功名や富貴というものはいつまでも守れるものではないと述べ、世を憤る様子を描写するものである。この内容は、直後の「英雄言氣、使人奮起（英雄の言氣、人を奮起せしむ）」という部分に呼応するために引用されており、英雄は前文の那須与一のみならず、屈原と楚王も含まれている。このような英雄の気概が人々を奮起させることを示している。

37　　　今日不知誰計会　　　　今日知らず誰か計会せし
　　　　春風春水一時来　　　　春風　春水一時に来る

37は「立春の今日、どこの誰が計算して春風と春水を同時にもたらすようにしたのであろう」というものである[11]。37の前には、物語の第二部分において、長半が流放の途上で館主に身を託す際、一家の状況が紹介されている。その託身の場面における時点の状況を表すために、37が引用されている。

57　屋漏更遭連夜雨　　　　屋漏れて　更に連夜の雨に遭い
　　頓開金鎖走蛟龍　　　　頓に金鎖を開きて　蛟龍走る

57は、もともと困難な状況の上に、さらに災難が重なり、事態がコントロールできずことを象徴的に表している。57の前には、長半が公時を殺害した後に逃亡し、暗闇の中で何も見えない状況において、公時の家族が長半を探す場面が描写されている。58は、その状況の緊急性と、長半一家の

11　日本古典集成『和漢朗詠集』、岩波書店、1983年、13頁。

不運な遭遇を強調するために引用されている。

79　上山擒虎易　山に上って虎を擒ふるは易く
　　開口告人難　口を開きて人に告ぐるは難し

79とは「山に登って虎を捕らえることは容易であるが、口を開いて人に訴えることは難しい」という意味である。本書では、勇位小説が登場する前に、その基本的状況を紹介するためにこの句を引用されている。前半の「上山擒虎易」は、後文における勇位小説の「力折豺狼、智欺公侯（勇をもって豺狼を殺し、智をもって公侯を欺く）」という描写を示すために用いられている。一方、後半の「開口告人難」は勇位小説が自ら復讐したい事件を他者に訴えることの困難さを描写するものである。

以上のように、本書における状況描写は、詩歌の引用を通じて物語の場面を具体的に描き出し、登場人物の心理や状況の緊迫感を強調する重要な手法として機能している。詩歌の引用は、物語の進行を補完するだけでなく、読者に物語世界の臨場感を伝える点においても重要な役割を果たしている。

2. 4. ④登場人物の台詞

本書において、登場人物の台詞として詩句が引用されている箇所は十一例確認される。その中で特に注目すべきは、引用51から55までの五例である。原文は以下の通りである。下線が付いている五箇所は51から55までの五例である。

酒酣、庶客囂囂然戲道:
<u>落花不言空辭樹、流水無心自入池。</u>
公時憮然指空道:
<u>花有百十紅、人旡十日好。</u>
長半睥睨道:
<u>言下暗生消骨火、笑中偷硎剌人刀。</u>
阿岩微笑道:
<u>三尺劍光冰在手、一張弓勢月當心。</u>
阿林横目道:
<u>四海安危照掌內、百王理亂掛心裏。</u>

以上の内容は本書の第二部分において、長半が旅の途中で公時の家に滞在する場面において、これら五例の詩が連続して登場人物の台詞の中に引用されている。この場面で、「東鄰取婦,四親與燕（東隣の婦人を娶り、四親は宴会に参加に行く）という宴会の情景の中で展開されており、金時一家が宴会に参加に行く際の状況が描写されている。引用された詩句はいずれも宴席における登場人物の台詞として用いられており、当時の宴会の雰囲気や登場人物の心情を反映した内容となっている点に注目される。

51　落花不言空辭樹　　落花言はずして　空しく樹を辭し
　　流水無心自入池　　流水心無くして　自ら池に入る

51は、白居易が元稹の死後、その邸を訪れた際に眼前の景を見て過去を偲びながら詠んだ[12]詩歌である。引用の前の「酒酣庶客囂々然戯道」は、酒宴が盛り上がる中、多くの客人たちが賑やかに冗談を交わしている情景を描写している。51は、公時の一家が催した宴会における客たちの台詞として用いられている。

52　花有百十紅　　花には百十の紅有り
　　人旡十日好　　人には十日の好しき旡し

52は、花が永遠に咲き続けることがないように、人間もまた長く幸運や幸福に恵まれ続けることはないという、人生の無常を詠んだ詩句である。本書においては、52の直前に「公時憮然指空道（公時は憮然として空を指し、こう言った）」という描写があり、52はその直後、公時の台詞として引用されている。これにより、作中人物の言葉として人生の無常観が効果的に表現されている。

53　言下暗生消骨火　　言の下には　暗に消骨火を生ず
　　笑中偸硎刺人刀　　笑みの中には　偸（ひそ）かに刺人刀を硎ぐ

53は、人間の心の危険性や信頼の難しさを詠んだ[13]詩歌である。ここでは長半の台詞として引用され、緊張感を伴う心理的な描写を補強している。

54　三尺劍光冰在手　　三尺の劍の光　冰は手に在り

12　日本古典集成『和漢朗詠集』、岩波書店、1983年、55頁。
13　日本古典集成『和漢朗詠集』、岩波書店、1983年、284頁。

一張弓勢月當心　　一張の弓の勢　月は心に当たる

54は、乱を平定した将軍の勇武を讃んだ[14]詩歌である。本書では阿岩の台詞として引用されており、復讐に臨む阿岩の力強さと決意を象徴的に描写している。

55　四海安危照掌内　　　四海の安危は　掌の内に照らし
　　百王理亂掛心裏　　　百王の理亂は　心の裏に懸けたり

55は、『和漢朗詠集』の「帝王」部に属しており、「天子は人を以て鏡とすることを説いたもの」[15]である。詩歌の内容は「天下が平和であるか危険であるかは、その手のひらの中に照らすように明らかに知られ、また古今百代の帝王の世が治まったこと乱れたことは、その心の中に明らかに写されている」という内容である。本書では阿林の台詞として引用される。

これら五例の引用はすべて宴会の場面で主人公たちの台詞として用いられている。そのうち四例は『和漢朗詠集』からの引用であり、本書全体で登場人物の台詞として使われる十一例の引用の中で重要な位置を占めている。これらの引用は、登場人物の心理や状況を象徴的に描写するとともに、物語のテーマや場面を深める役割を果たしている。

2. 5. ⑤人物描写

本書では、人物描写のために全二十五例の詩歌が効果的に引用されており、その目的は大きく三種類に分類される。それぞれ、性格六例、感情（心理）十八例、外見の描写一例に関連している。以下に具体の四例を挙げて考察する。

・性格

登場人物の性格を表現するために引用される詩歌の六例のうち一例を挙げる。

7　三冬不改孤松操　　　三冬も孤松の操を改めず
　　萬苦難移烈女心　　　萬苦も烈女の心を移し難し

この詩は、厳しい冬に一本の松がその節操を保つように、多くの苦難にあっても女性の堅い意志

14　日本古典集成『和漢朗詠集』、岩波書店、1983年、256頁。
15　日本古典集成『和漢朗詠集』、岩波書店、1983年、246頁。

や忠誠心が揺るがないことを詠んでいる。物語の第一部で女性主人公・阿岸が初登場する直前に引用されており、彼女の性格を象徴的に表現する要素として機能している。阿岸の強い意志や忠誠心が物語の中で重要な役割を果たすことを示唆し、この詩歌の引用によって彼女の人物像が一層鮮明に描かれている。

・感情（心理）

登場人物の感情や心理状態を表現するために引用される詩歌の十八例のうち、以下の二例を挙げる。

5　憂知酒聖　　　　憂ひて酒の聖なるを知り
　　貧覺錢神　　　　貧して錢の神なるを覺ゆ

5は、深い悩みや苦しみが酒の魅力を感じさせ、貧困が金銭の重要性を認識させるという心理的状況を表現している。本書では、石川夫婦が経済的な困難に直面する場面において引用されている。夫婦が庭園を掃除し宴会の準備を進める中で、彼らの価値観が変化していく心理の描写を補強する役割を果たしている。

39　養得自為花父母　　　養ひ得ては　　自ら花の父母たり
　　洗來寧辨藥君臣　　　洗ひ來たては寧ろ藥の君臣を辨ぜんや

39は薬草栽培を詠むものである。内容は「花の開くのは雨が養い育てたのであるから、雨は自然花の父母といえる。また、雨はすべての薬草に平等に降りそそぐのであって、どうして君薬や臣薬の区別をしようか」[16]というものである。39の内容は何かを育てる過程について描写している。花には雨に対する感謝の念が湧き上がることを示唆しており、これは恩人に対して感謝の念を持たない長半のことを風刺している。

・外見（見た目）

登場人物の外見を描写するための例としては、以下の1例がある。

41　眼如日月　　　眼は日月の如く
　　眉似長劍　　　眉は長劍に似たり

---

[16] 日本古典集成『和漢朗詠集』、岩波書店、1983年、39～40頁。

41の直後には、長半の服装について「錦裳雲飄、羅衣花輝」すなわち、「錦の衣が雲のようにたなびき、羅の衣が花のように輝いている」と表現されており、41と連動した服飾描写を通じて、登場人物である長半の外見が視覚的に提示されている。本書において、41は登場人物の容姿を直接描写する唯一の詩句であり、長半の容姿の優美さを際立たせる役割を担っている。

2. 6. ⑥景色描写

本書において、景色を描写するために引用された詩句は二十八例があり、そのうち九例を挙げる。

6　峨眉山月半輪秋　　　峨眉山月　半輪の秋
　影入平羌江水流　　　影は平羌江水に入りて流る
　夜發清溪向三峽　　　夜清溪を發して三峡に向かふ
　思君不見下渝州　　　君を思へども見えず　渝州に下る

6は『唐詩選』から引用された李白の「峨眉山月の歌」であり、この詩歌は高い山に半月が出たのを見て作った[17]詩歌である。6の前には、八月のある夜に、石川夫婦が自宅で宴会を催し、明月を眺めながら酒を酌み交わす情景が描かれている。この詩句の直後に「如是景緒、如今般良夜何」（このような風景、そして今のような良い夜はどうすればよいだろうか）という文が続いており、詩句を借用して景色を表現する意図が明確に示されている。

また、物語の進行に伴い場面や場所が転換される際、景色描写がその転換を補助する役割を果たしている。以下の引用はその代表例である。

17　棹水疑山動　　　水に棹させば 山の動くかと疑ひ
　揚帆覚岸行　　　帆を揚ぐれば 岸の行くを覺ゆ

17は「水に棹させば山の動くかと疑い、帆を揚げれば岸の行くを覚ゆ」という内容である。この詩は物語第二部分の最初の部分に引用されており、登場人物の移動場面の導入として用いられている点に注目される。17の前では、長半の旅立ちの様子が描かれ、17の後では、長半が旅の途中で目にした風景が叙述されている。構成上、物語の第一部分から第二部分への場面転換を機能的に支えている。また、詩句の前文に記された「群山眼頭飛、碧水鼻下極（群山は眼頭に飛び、碧水は鼻下に極まる）」という表現が、長半が目にした自然の美しさを描写しており、17の引用はそれに呼応

[17] 服部南郭述、日野龍夫校注『唐詩選国字解』第三巻、東洋文庫、1982年、103～105頁。

して、長半の船の旅路における景色を印象的に表現している。

18　山復山　河工削成青苔巖　　　山復た山　河れの工か 青苔巖を削り成せる
　　水又水　誰人染出碧水潭　　　水又た水　誰人がにか 碧水潭を染め出だせる

18は「山々が頂なり連なって、古い巖が聳え立っているが、あれはどんな名工が削って作り上げたのであろうか。また、多くの水が廻り流れて、深い淵は緑の色に染められているが、どんなに上手な染物屋のしわざであろうか」[18]という内容であり、自然の造化の妙を讃えたものである。17の例に続いて引用されている。同様に、長半が目にした景色を描写し、自然の雄大さと美しさを際立たせている。

42　池凍東頭風度解　　　池の凍の東頭　風度りて解き
　　窗梅北面雪封寒　　　窗の梅の北面　雪封じて寒し

42は、「春風が吹き始めて、池に張っている氷も東の方は解けだした。けれどまだ冬の景が残っていて、窓の傍にある梅の北側の枝は残雪が消えやらず、花が開くには至らない」[19]との春の景色を表現している。時間の変化、すなわち冬から春への移行を描写している。この詩句の直後には「時已三朝[20]」という表現が続くが、42は、春の訪れを象徴的に描き出す詩句として、後文の「時已三朝」という時間の変換の描写と呼応するために引用されている。

61　春水滿四澤　　　春水　四澤に満ち
　　夏雲多奇峰　　　夏雲　奇峰多し
　　秋月揚明輝　　　秋月　明輝を揚げ
　　冬嶺秀孤松　　　冬嶺　孤松秀づ

61は「四季の風景を描写した詩句である。それぞれの句は、春の水、夏の雲、秋の月、冬の山と松を象徴的に描き、自然の移ろいを視覚的に表現している。61の直前には、「歸之目下、波濤之險、頓覺戰栗（目下に帰ると、波濤の険、にわかに戦慄を感じる）との記述があり、これは阿岩が敵を探して旅に出た際、目の前に広がる景色を目にし、波濤の危険を感じて思わずおののく様子を描写

---

[18] 日本古典集成『和漢朗詠集』、岩波書店、1983年、193頁。
[19] 日本古典集成『和漢朗詠集』、岩波書店、1983年、12頁。本詩句は『和漢朗詠集』において「立春」部に収められており、まさに春の訪れを象徴的に描いたものである。
[20] ここでの「三朝」とは「元日（元旦）の朝」を指し、時節の変化を象徴している。

したものである。61は、こうした阿岩の目に映る自然風景を補足するかたちで引用されている。

86　林間煖酒焼紅葉　　　　　林間に酒を煖めて紅葉を焼き
　　石上題詩拂綠苔　　　　　石上に詩を題して緑苔を拂ふ

86の内容は林の間で紅葉をかき集め、それを焚いて酒をあたため、石の上の緑苔を掃い落してそこへ詩を書きつけたという内容であり、寺院にて秋の興趣を賦した[21]ものである。86の前文に「芳樹、深林に一狂一乞（芳しい木々と深い林の中に、一人の狂人と一人の乞食がいた）」という描写があるのに続き、登場人物の狂者、乞人二人がいる場所の景色を表現するために引用される。

90　三五夜中新月色　　　三五夜中　新月の色
　　二千里外故人心　　　二千里外　故人の心

90の前文に、「俱走茶店、小説笑道、房國竹田、汝等幻夢、我通力已知之、此夕設燕席（二人も茶店に入ると、小説は笑って言った。房國の竹田、あなたの幻夢はすでに見抜いている。今夜は宴会を設けよう）」とある。これは、長半の所在が明らかになったことから、宴を開くという展開である。90は八月十五夜の、新たにさし出た清い月の光を見るにつけても、二千里の彼方にいる友人の心が思いやられるという[22]、遠く離れた友人を思って詠んだものであるが、復讐の対象である長半に思いを馳せるという内容ではなく、今夜の美しい月夜の景色を描写するために、この詩句が引用されている。

94　邊地鶯花少　　　　邊地　鶯花少なく
　　年来未覚新　　　　年来れども　未だ新たなるを覚えず
　　美人天上落　　　　美人　天上より落ち
　　龍塞始應春　　　　龍塞　始めて應に春なるべし

94は永楽公主が異民族の地へ嫁入りしてゆくことを詠じた詩歌[23]である。この詩は永楽公主嫁ぐ際の心情とその境遇を詠じたものである。94の前文には、「行李兩刀心如飛、奮袖而起、履及窒皇。杖及兩國橋、碗及下總市、袋及房國府」とあり、これは「（阿岩の）荷物と二本の刀を携えて心は飛ぶように急ぎ、袖をふるって立ち上がる。足は窒皇に至り、杖は兩國橋に至り、碗は下総の市に

---

[21] 日本古典集成『和漢朗詠集』、岩波書店、1983年、28頁。
[22] 日本古典集成『和漢朗詠集』、岩波書店、1983年、95頁。
[23] 服部南郭述、日野龍夫校注『唐詩選国字解』第三巻、東洋文庫、1982年、14頁。

至り、袋は房国府に至る」と解される。すなわち、阿岩が旅の途上で各地に至るさまを表現したものである。本書において94は、異郷における孤独や不安を抱えながら旅を続ける阿岩の姿を重ね、彼女が直面する情景を描き出すために引用されている。

2. 7. ⑦結末のまとめ

本作の最後では、計四例の詩歌が連続して引用されており、それぞれが物語の結末を補強する役割を担っている。本節では、全四例の詩歌を引用順に分析する。

103　太極一心中　　　　太極は一心の中
　　萬古片手裏　　　　万古は片手の裏

103は、正文の直後に引用されている。この詩歌は、主人公である阿岩が復讐を果たし、その後、閻王から復讐行為が無意味であるとの裁定を受けたうえで尼僧となった境地を表現している。これにより、阿岩の悟りの境地が描写され、物語の結末に深い余韻を与えている。

104　身如鐵石　　　　身は鉄石の如く
　　心似龍蛇　　　　心は龍蛇の如し

104は、人間の性格や資質を称賛する内容であり、特に阿岩の人格を高く評価する意図が読み取れる。この詩歌は、阿岩が復讐を遂げた後、閻王の審判を受けて復讐の行為の無意味さに気付き、その教えに感銘を受けて仏教に帰依するという結末を描いて、復讐者としての毅然とした姿勢を象徴的に締めくくる役割を果たしている。

105　天下恭平樂　　　　天下　恭平にして樂しみ
　　福壽海無盡　　　　福壽　海のごと無盡なり

105は、天下の調和と繁栄、人々の幸福と長寿の無限性を描写している。この詩歌は、物語の最後の局面で理想的な社会を詠じるために引用されており、本作の教訓的メッセージを象徴的に表現している。これにより、読者に「調和と幸福」という普遍的価値を訴えかける。

106　長生殿裏春秋富　　　　長生殿の裏には春秋富み
　　不老門前日月遲　　　　不老門の前には日月遲し

106は、長生殿の内では、わが君も若くこれから多くの年を重ねられるに違いないし、不老門の中では月日の過ぎるのも遅く、老を迎えられることなどないという意味であり、天子の万年を祝った[24]ものである。この詩は、天子の「万年の安泰」を祝う意図を示し、理想的な統治の永続を願うものである。それが全書の最後に配置されることで、物語全体を締めくくる役割を果たしている。

おわりに

引用内容と文脈の関係について、上記の分析から明らかになったことは、作者川合仲象が明示した百六例の引用がすべて、引用内容とその文脈との関連性を確認できるという点である。各引用は表に示した通り、具体的な文脈と結びついており、それぞれが物語全体にどのように寄与しているかが明確であると思われる。

形式的側面に注目すると、百六例のうち五例が小説の形式面で重要な役割を果たしているといえる。具体的には、「冒頭の導入」（一例）および「結末のまとめ」（四例）に該当する。これらの引用は、小説としての構造を支える要素として機能している。

一方､内容的側面に関する分析では､引用は以下の五つのカテゴリーに分類できる。「②予兆」「③状況描写」「④登場人物の台詞」「⑤人物描写（性格･感情･心理）」「⑥景色描写」である。「②予兆」の八例は、伏線として物語の緊張感や期待感を高める効果を持つ。この中で最も多いのは「③状況描写」であり、二十八例が該当し、全体の約三割を占める。状況描写は物語の舞台や背景を詳細に示し、登場人物の行動や心情を際立たせることで、物語の進行に重要な役割を果たしている。また、「④登場人物の台詞」（十一例）は、引用された詩歌を登場人物の発言として使用し、物語の進行や人物の性格描写を強調している。「⑤人物描写」は「性格」（六例）、「感情」（十八例）、「外見」（二例）に細分化され、これらの描写は登場人物を立体的に描き出す役割を果たしている。一方で、「⑥景色描写」（二十八例）は物語の舞台を具体的に描写し、読者が物語の世界に没入するための重要な手段として機能している。

以上の分析により、百六例の引用は『本朝小説』の形式的および内容的要素として、物語全体を支える役割を果たしていることが明らかとなった。特に、「状況描写」の引用が多く、物語の進行を具体的かつ効果的に補強している点が顕著である。最後に、これらの百六例の引用は、引用内容と原文の文脈とが密接に関連し、作者の意図や物語の構造を的確に示していることが確認された。

＜参考文献＞

榊原篁洲著『古文真寶前集諺解大成』（早稲田大学図書館蔵、天和三年 [1683]版、https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/he16/he16_01752/index.html）

24　日本古典集成『和漢朗詠集』、岩波書店、1983年、289頁。

目加田　誠　新釈漢文大系19『唐詩選』（明治書院、昭和39年［1964］3月10日、初版発行）
星川清孝著　新釈漢文大系『古文真宝、（前集）』（明治書院、1963-1967年）
星川清孝著　新釈漢文大系『古文真宝、（後集）』（明治書院、1963-1967年）
李攀竜編選、服部南郭考訂『唐詩選』（早稲田大学図書館蔵、宝暦十一年 [1761] 嵩山房の版本、https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/i17/i17_02049/index.html）
服部南郭述／日野龍夫校注『唐詩選国字解』（東洋文庫、1982年）
日本古典集成『和漢朗詠集』（新潮社、1983年）